

## 中央大学史資料集第六集の発行にあたって

本集は、昨年三月に第四集として刊行した「菊池武夫関係史料 一―書簡編」につづき、菊池武夫の日記を収録した日記編になります。菊池武夫日記は、これまで十一冊が確認されており、その年代は、米國に留学した明治八（一八七五）年から、法曹界の重鎮として活躍した明治三十九（一九〇六）年までで、のべ二、三〇〇頁という膨大な量にのびます。このため日記編は、編集の都合上編年順に三分冊とし、本集を第一分冊に、第二・三分冊は来年度以降に第九集ならびに第十一集としてそれぞれ刊行する予定です。日記編全体の構成については、本集の目次に掲載してあります。

日記編第一分冊にあたる本集は、明治八年から明治二十一年までの日記七冊を収録しました。このうち五冊は、菊池の留学関係の日記で、当時の留学生活や欧米文化の諸相を詳しく伝えていきます。第三集の書簡編の中にも同一時期の関連記事がありますが、日記という性格から微妙な表現の違いなどもあり、両者を対比させて分析することで、さらに深い理解が可能であると思えます。

残りの二冊は、明治十三（一八八〇）年十月に帰国し、司法省に奉職してからの菊池の生活記録などが記されており、とりわけ日記中に併記されている金銭出納帳は、日々の細かな収支まで克明に記している点で、当時の「法学エリート」Ⅱ官員の経済状態などを窺い知ることができ、貴重な史料であります。本学の前身英吉利法律学校の創立者たちが、開校当初にいわゆる手弁当で講義し校務を分担したのは、たんに英米法を社会に普及しようという熱意だけでなく、それを支えた経済的基盤について探る手掛かりとして、これらの史料の意義は大きいものと確信いたします。

第四集につづき、貴重な史料を提供され翻刻をご快諾下さいました菊池英子氏、菊池武範氏、蘆野みち氏、友田靖子氏に対しまして心から感謝申し上げます。

一九九〇年三月

専門委員会主査

菅野芳彦